

『七草集』の考察

宮 川 康 雄

I

『七草集』は正岡子規の学生時代の文芸活動を代表する作品である。しかし、これについてのくわしい考察はいまだみられない。子規の生涯の業績を述べる者は必ずこの作品に触れるのであるが、これに考察らしい考察を加えたものはまだないのである。しかし『七草集』は、知られているように、文芸的に未熟なものであったとはいえ、趣向が新しく、変化に富み、かつ子規の多様な才能のよくあらわれた作品である。しかも子規は、この作品の制作を機として、生き方の上でも大きな転換を遂げたのであった。このような作品である『七草集』がいつまでも現状のまま放置されていることは、遺憾なことであるといわなければならないであろう。これが本稿で『七草集』をとりあげることにした所以である。

ところで『七草集』は子規がはじめから制作の意図をもって作った作品ではなかった。それは、はからざるに生まれた作品であったともいえるであろう。制作をめぐるこのような特別の事情がある『七草集』を理解するためには、その制作の経緯を明らかにすることが必要であると考えられる。そこで本稿ではまず、この作品の制作の経緯の解明を中心に考察をすすめる。そのあと、子規の作家活動における『七草集』制作の意義について述べてみたい。

はじめに断っておかなくてはならないのは、ここに『七草集』というのは『子規全集』(アールス・改造社刊)に収められているテキストとはかなり違うものであることである。全集所収のそれは、子規が後年に大幅に加筆改変を加えたものであり、それによって子規が学生時代に作った『七草集』とは別のものとみることもできるほど変貌してしまっているのである。ここでとりあげる『七草集』は、子規の学生時代の作品とみらるべき制作当時の『七草集』である。こうした場合には、これら両者のちがいを明らかにすることをさきにすべきであるが、その一部についてはすでに復刻したこともあり、いま本稿の叙述にそう大きな支障をきたすおそれはないので、必要なときは本文中に注記することにして省略し、本稿をなすことにしたのである。

II

『七草集』は明治二十一年の夏、子規が江東向島に寓居した際に制作した作品である。当時子規は第一高等中学校に在学中であり、この年の夏休みを過ごすために向島に仮寓し、その間にこの作品を作ったのである。

『七草集』は向島の風物に取材し、もしくは、この地における折々の子規の感興の表白などを主たる内容とした作品であって、これは、子規の向島仮寓があってはじめて生まれたものであった。

それでは子規は『七草集』を作るために向島に仮寓したのであるかといえ、それはそうとはいえない。

子規はその仮寓の意図については次のように述べている。

毎年夏に至れば二ヶ月餘の休暇を得るものから都に残りゐる事は少なく故郷に帰らざるも他国へ旅立つなど多かりける今歳ハ故郷松山へも帰らず又行脚の僧を真似て草枕に日をくらすの望ミもなく東京に留まるも町中の塵を猶此上にかうふらんハ本意なきことなれハとて向島の山本屋にかりすまひすることに定めぬ

これは『七草集』の「尾花のまき」の前書であり、まず信頼してよい記述であるが、これによれば、子規が向島に仮寓したのは、都塵を避けて閑静の地において夏休みを過ごさんがためであったということになる。そして子規は、上記の文章からみる限り、そのほかにはなんの意図ももっていないようにみえるのである。

ところが子規はこれよりあとに記した随筆『筆まかせ』のなかの一文でもこの仮寓について触れており、そこでは次のように記述しているのである。

連年遊びて暮しぬ。かくては行末の大望も覚束なしと心いらだつものから、二十一年の夏は素志を果さんと閑静なる地を墨江に卜し、此時より初めて勉強したり。(若し勉強といふべくんば) (当惜分陰)

すなわち、この文章に述べるところからすれば、子規には、仮寓に際しての明瞭な目的があった。子規が向島に行ったのは避暑などのためではなく、「行末の大望」のために、「素志を果さん」とするにであったのである。

ここに子規が「勉強」といっているのは、『七草集』を作ったことをさすのであるけれども、これはむしろ、結果的にこの作品を制作したことをさすようになったまでのことであり、子規のいう「行末の大望」や「素志」が作家になろうとする望み、そのために傑作をものしようとする気持などではなかったことはいうまでもないであろう。子規の「行末の大望」とは文芸作品の創作のような趣味的な方面においてではなく、もっとまっとうな分野において、後世に名を挙げんとする大望のことであったということができ、「素志」とはそのために勉学に励もうとする意志のことであった、と考えてよいと思われる。

こうして、これら二つの文章を比べてみると、子規の向島仮寓の意図は、むしろこの後者の「当惜分陰」という一文にあらわれているのではないかと推測されるのである。

この推測は、さらに次のような事実によって補強されるように思われる。

それは子規が旧松山藩の子弟として旧藩主久松家の設立した常盤会から学費の支給を受けていたこととともに、この時に向島に仮寓したのが子規ひとりではなく、同じ書生の身であった再従兄の三並良(松友)や従弟の藤野潔(古白)といっしょであったこと、そして、この仮寓の費用は親戚中での有力者であり財力をも有していた潔の父から出ていたらしく、奨学の意味をこめてこのような援助をこれまで与えてきていた潔の父漸に対し、子規もこれにこたえるべく努めねばならぬという気持を強くもっていたであろうと考えられることである。すなわちこのようなことから、子規の向島仮寓の目的は、この閑静の地向島において、他の二人といっしょに勉学に励まんとすることにあった、といってよいように思われるのである。

そうした子規が、ではなぜ『七草集』のような作品を制作したのであろうか。このような疑問が、つぎに当然おこってくるであろう。それについては、子規は次のように述べている。

おのれ去年の夏牛嶋長命寺にかりやとりしぬ。焼くが如き熱さになすこともなくて、ひねもす内にたれこめ机に向ひみれば心ぐるしき事いはんかたもなし。されど最早都に帰るべき日も近づきたり若し帰りて後、友どちの「日々墨田に耳を洗ひ都島を友として何をかなしつる向嶋の土産ハありやなしヤ」と問ハれなば何と答へん。いとほづかハしきこと也と思ひ云々（七草集を読ミ給へる君だちにまをす）

これは子規が『七草集』を完成した翌二十二年の春にこの作品の巻末に記した跋文の一節である。子規が『七草集』を作ったのは、向島滞在の土産として友人に見せるためであったというのである。これを思いついたのは休みのおわり近くなってからのことであるといっているのは、この場合いかにもありそうなことであったと思われる。

しかし、この説明には充分納得しがたいものも感じられる。それは『七草集』を制作するとなれば、相当の時間と労力を必要とするであろう。それを勉学を目的として向島に寓居した子規が作ったとすると、そこには子規の気持の向かう方向に何かしらの転換があったものと推測せざるをえず、それには上記の理由だけでは軽すぎるように感じられるからにほかならない。『七草集』を子規が作ったのには、なにかほかにもっと理由があったのではないであろうか。

このような疑問について調べてみると、そこには次のような事情のあったことがわかってくる。すなわち、子規たちが向島で寓居することになった家は、寺島長命寺門前の山本屋という桜餅屋であったが（子規たちは偶然のことからこの家の二階に住むことになったのである。子規はこの家を「月香楼」と名づけた）、この家は隅田川の堤に近く、このあたりは、『墨水遊覧誌』（佐原菊鳩編）にも、「此寺の前なる堤の上よりすみだ川の風景第一なり」と記されている眺めのよいところであった。このことは子規も、『七草集』の「尾花のまき」で、

楼上よりも川の面を打なかむへくさなくとも庵を出てつゝみに上れば川一面はいふもさらなり富士筑波の山々まで見え渡り其なかめこそいとたへなれ

と記していることから、認めていたことが知られる。向島に寓しこうした環境のなかに身をおくことになった子規は、そこで、目的が勉学にあったとはいうものの、しばらくするうちに、このようないわば、向島の風趣とでもいうべきものを味わおうというような気持に次第に傾いていったらしいのである。

向島の風趣を味わおうとする気持は、もとより向島に仮寓するにあたって子規のころのなかにはある程度期待としてあったのであり、仮寓は、ただ勉学に専心するためというだけではなかったであろう。しかし、実際にこの地に身をおいた子規は、ここには期待した以上のものがあるのを見出して、心中にたいへん満足を覚えたのであった。

子規は、「墨江僑居記」（「蘭之巻」）にも、そのことを、

居十数日。雨暁風夜。所見尽奇。所聞愈妙。独喜所得過所期。

と記している。

こうして子規は仮寓して以来、友人佐々田八次郎（採花）にさそわれて一度横須賀・鎌倉の方面に遊んだほかは、まったくこの土地を出ることなく、自足の生活を送っていた。そして子規は日を重ねるにつれて、やがてこれまで向島の美趣を代表するものとされてきた墨堤の桜花、長命寺の白雪などよりもこの地にはさらに多くのすぐれた美趣のあることを認めるようになった（「未不笑都人士徒賞墨江景勝。而不知景勝却在紅花白雪也。」墨江僑居記）。

そしてのちには『七草集』のなかで次のように得々と記すようになっていったのである。

同窓之友五六。時乘小艇訪余寓。相延上楼。当茶以桜花湯。当菓以桜花糕。共話墨江風致。(中略)余詳説前人未得之趣。而竊喜為墨江増価値。(墨江僑居記)

ところがこのような子規の生活はひとつのできごとから大きな変化をうけることになった。それは一夏をこの宿にともに過ごすことになっていた三並・藤野の二人が、子規が相模の旅から戻ってくるのと入れかわりに駿河への旅に出たが、それから戻ってくると、一日二日のうちに相ついで宿を立ち去ることがおこったのである。二人の去った理由が留守中の子規と宿の娘おろくとの仲を疑い不愉快に感じたからであるらしいのはあとでわかったことで、この時の子規はまだそのことを知らなかった。しかし理由も告げずに二人が立ち去るといふ予期せぬできごとによって子規は精神的に大きな衝撃をうけた。しかもとどめることもできないままにひとり宿にとりのこされることになったのである。

この間子規は、二人の仲間が旅に出てから訪い来る者もなく、話相手のいない寂しさからよく外出するようになっていたらしい。子規は隅田川の堤を歩き、向島の各地を逍遙した。そこへ二人が帰ってくるとすぐ宿を立ち去るといふことがおこったことによって子規の生活は大きく変らざるをえないことになった。それが具体的にどう変っていったか、必ずしも明瞭にすることはできないけれども、かなり大きな変化をきたしたであろうことは推測にかたくない。当時のことを「刈萱のまき」には「つとに起き夜半に寝ぬるまで書机にのみ向ひて古今の人を親しみけるこそ云々」と記しているが、「墨江僑居記」に、同居の二人の駿河への旅の留守中のこととして

欲訴幽愁干白鷗。而閑行探勝。未曾一日廢也。(後年の加筆では「自是無剝啄之声、乃閑行探勝、社寺尽詣、田隴備究」となっている)

と叙したような日々を子規はそれ以後も継続するようになったのではないかと思われる。

そして子規は、「閑行探勝未曾一日廢也」といふような毎日を過ごすうちに、やがて自分の前に、思いがけなくも新しい境地がひらけてくるのを感じたのであった。

それは「形与気と心与境合」といふ境地である。子規はここに「不復知孤栖無聊。始悔前之待人。而樂今之独擅」といふ心境に住するようになり、「蓋所言愈少。而所得愈多。所得愈多。而所言不可尽也。」(加筆したものには「自有得于心而筆不可尽焉」とある)と述べているような、これまでとはまるでちがった境地へと踏み入っていったのであった。

このようにして仮寓した頃と比べると子規はいちじるしくかけ離れた気持で日々を過ごすようになった。そして休みのおわり近くなってふと思いついたのが作品を作って友人への土産としようという考えであったと思われるのである。

III

『七草集』がこのようにして創作へと心に向けた子規の作ったものである以上、それがそれまで強く子規の心をひきつけていた向島の風光・風物に取材し、もしくはこの地における子規の折に触れての感興を表白したものとなったのは、ごく自然のことであったといえるであろう。それはここに一夏を過ごした子規の向島土産としてもまた似つかわしいものであったのである。

ところで、『七草集』は様式の異なる作品をもって各巻を作り、それらをまとめて全体と

して一つの作品とするという、新しい趣向をもって作られている。この趣向を子規はどこからえたのであろうか。

それについては、子規はこれを向島の百花園の秋の七草から示唆をえたものであったといえることができる。

子規が作品を作ろうとした時あれこれと趣向を思いめぐらしたことは、『七草集』の跋文に、「つたなき文もなきにはまさりなんやと思ふものから固より素人の即席料理ハ植半、八百松の珍味に飽き給へる諸君子の口になふべくもあらず。」と述べていることから明瞭であるが、その結果子規は、百花園の秋の七草に示唆をうるところがあり、「それよりハ目さきをかへ、舞台を廻す方、少しハ御なぐさミにもやなるべからんと」、このような趣向を構えたのであった。

この百花園というのは、さきに引用した『墨水遊覧誌』の編者佐原菊塙が文化元年（一説に二年）に向島の地に開いた梅園のことで（現在東京都墨田区東向島三丁目にある）、四季を通じて園中にもろもろの草木の花がひらき、向島の名所のひとつとして古くから知られていたのである。ことに、この庭園が秋の七草をもって名高かつことは、たとえば、明治二十二年刊行の『東京漫遊独案内』という書物をもて、「百花園 向島の内寺島村に在り新梅屋敷といふ詩仙老人が春夏秋冬花た江ずと門辺に残せし聯の一句空しからざる中にも秋の七草をもて第一と為るなり」と記されているなどによって知ることができよう。

子規はもちろんこの百花園のことは早くから知っていたであろうし、向島に滞在している間にもここを訪れているから、「女郎花の巻」の詞書に「花やしきの七草を見んとして行き侍る」とある）、この七草から示唆をうけることがあったとしても、むしろ当然であったといえるべきであるかも知れない。

もっとも、子規がこのような趣向を構えることになったのは、その前に、向島に滞在している間に、郷里に帰っていた友人の竹村鍛（鍊卿、河東碧梧桐の兄）や武市庫太（蟠松）に漢詩を作っておくったり（「菘之巻」に附録として収められている）、前年の夏に帰省した折に訪問して以来、文通を続けていたらしい郷里の老俳人大原其戎に宛てて近況を報じた手紙を書いて、其戎から、「殊ニ御転宿ハミ（原）めく社近辺如仰数々風交之場所ニ而一段御楽可御座候追々御風調御泄し可被下候云々」（大原其戎先生の手書写し）などという返事を貰ったりしているということがあり、これらが準備的な役割を果し、そして、それが『七草集』に結実したということであったのかも知れない。

この『七草集』の正しい名称は『無何有洲七草集』である。「無何有洲」という角書は「むこうじま」、『七草集』は「ななくさしゆう」と読むのであるが、『七草集』のよみ方については子規自身にローマ字で“Nanakusa-shū”と記したものがあり、その由来は上述のとおりであるから問題はないとして、この角書については、ひとこと説明を加えておく必要がある。

これは『莊子』の「逍遙遊」にみえる「無何有之郷」をもじったものである。子規は大学予備門（第一高等中学校の前身）に入学する以前、受験準備のために神田の共立学校に通っていた時にたまたま『莊子』の講義を聞いて興味を覚えてからこの書を受読書のひとつにしていたので、このときにこれを思いついたのであったろう。子規が向島を『莊子』の理想境に擬したのは、酷暑塵埃の都心から離れた別天地という意味からであるにちががなく、いかにも才氣煥発のかれらしい洒落であったといえる。しかし、それは単に洒落であるというば

かりではない。この角書には往年の向島の閑静な様子を想像させるものがあり、また当時の子規の風流意識というものもわかかれるのであって、『七草集』の角書として、これはまことにふさわしいものであったと感じられるのである。

なおでき上がった『七草集』には、巻ごとに「蘭之巻」(莞菴少年)・「萩之巻」(瀬祭魚夫)・「女郎花の巻」(うすむらさき)・「尾花のまき」(真棹家丈鬼)・「薺のまき」(あさかほのまき) (無縁癡仏)・「刈萱のまき」(不明) というようにそれぞれ別の筆名が記されているけれども、これらは『子規全集』所収の『七草集』には欠けているので、ここに注記しておくことにしたい。

IV

子規はこのようにして筆をすすめていって『七草集』を作りあげたのであったが、子規がこの作品を仕上げるまでのことを想像してみると、そこには次のような疑問が生じてくる。

それは、『七草集』の跋文によれば、子規はこの作品を休みのおわり近く、都に帰るべき日が近づいてから思いついて作ったとしているけれども、果してそうであったであろうかという疑問である。たとえば、『七草集』のなかには「寄墨田川名所恋」(「女郎花の巻」)という作品があり、これは子規がこの地の文雅の伝統ともいべきものについてある程度の知識をもっていたことを予想するのではなくてはどうして作りえたか疑問に思われる作品である。むろん子規は向島に仮寓してから「独喜所得過所期」といったりなどしていることから、そうしたことについてある程度の知識をもっていたことは確かである。しかし、子規のそうしたことについての知識が実際にどの程度のものであったかは必ずしも明らかではないのである。

しかるに子規の記述は作為のないのがふつうであって、この場合にしても、多少の潤色はあるにしても、事実をまげて記しているとは考えられないのである。

そこでこの問題を考えることにするが、それにはその前にまず、この向島の文雅の伝統とはどういうことをいうのか、いくらか述べておかななくてはならないであろう。

古く伊勢物語の在原業平の都島の歌によって知られてきた向島が世に広く知られるようになったのは近世に入ってからであった。近世隅田川を隔てた江戸の地に幕府を開いた徳川氏は、この土地をはじめ射獵の地としたが、その後四代將軍家綱の時常州桜川から桜樹をとり寄せて隅田川の堤上に植えさせ、また八代將軍吉宗の時にこれに補植をして剪伐を禁じた。爾来土地の人びともこれに桜や柳を植えつぎ、保護に力を尽して、明治にいたるのである。

この間向島は江戸諸階層の人びとの遊覧の場所となり、ことにその桜樹の花の咲く季節などの賑わいはたいへんなものであったらしく、松平定信の『花月草紙』や寺門静軒の『江戸繁昌記』などにはそのありさまがよく描き出されている。

この向島にはまた多くの文人墨客が遊んだ。早く長命寺における芭蕉の雪見の旧跡や『五元集』にみえる其角の三田稲荷(田中稲荷)奉納の句の故事などは人のよく知るところであろうが、このような類いのものが時代がくだるとともに次第に数を増し、しまいには、『墨田川遊覧誌』に、「やんことなき御方の御遊よりして、みやびなる人、またまれ人の詩歌を作、春秋の月花をめで給へば、隅田川のすみずみまで古跡ならざる所もいまは名所となりぬ、」と記されるまでになっていったのである。

文人墨客のなかにこの地に住みつく者のできたのも、こうした状況のなかにおいては当然のことであったといえる。それはやがて一種の流行をきたした。子規が仮寓した頃の向島にはそうした空気がまだのこっていたのであった。たとえば成島柳北はその居「松菊荘」に歿して、その碑が翌十八年長命寺の境内に建てられたばかりであったし、これと親交のあった依田学海は、なおその「柳蔭精廬」に悠々自適の生活を送っていたのである。長命寺の隣の弘福寺の山門脇の梵雲庵には淡島椿岳も住んでいたし、七世老巖堂永機も近くの三囲稲荷の其角堂に、この年の秋までは滞留していたことが知られている。

向島はこのような土地であったのである。さきに『七草集』を作るには向島の文雅の伝統についての知識をもっていなくてはならぬといったのは、むろんこれらのことすべてに子規が通じていなくてはならぬということをおうとするものではない。しかし向島がこうした土地であることを知り、それへの関心と知識とをもっているようではなかったとしたら、それは作ることのむずかしい作品であったことは確かである、そういうのである。

さて子規がそうした知識をどの程度にもっていたかということであるが、これについては、調べてみても、じつはよくわからない。子規はただ、まだ郷里の松山にいた少年の頃すでに、在京の三並良に宛てた手紙（明治十五年）のなかで、「春は墨堤に徜徉して桜花を望み云々」と記し、「隅田でふ堤の桜咲けるころ花の錦をきてかへるらむ」の一首の歌を添えていることから、早くから東都へのあこがれのなかで上述の伝統の一端に触れていたということが出来る。そうして上京して以後はその知識も増加していったであろうことが充分推察されるのである。しかし、子規の知識がどの程度のものであったかを具体的に証明できる資料はなく、結局それはいまのところ明らかではないといわなければならないのである。

つぎに、『七草集』の制作についてのもうひとつの疑問は、子規がこの作品を作るための時日のゆとりはどうであったろうか、ということである。すなわち子規のいうようにこの作品の作られたのが休みのおわり近くなつてのことであったとすると、子規はそうした短い時日のうちにどのようにしてこれを作ることが可能であったであろうか。もっとも子規がこのことを思い立ったのが具体的にいつであるかは跋文からは知ることができず、その点いづかあいまいなところがありはする。しかし、ともかく工夫をこらし変化に富んだ『七草集』を休みのおわり近くなつて作るの、かなりむずかしいことのように思われるのである。

しかし、この疑問については作品の内容を仔細に検討してみると、思いのほか問題のないことがわかる。

その理由の第一は、『七草集』の内容をなしている作品の形式は、いずれも子規にとって馴染みのあるものであり、これらを作るのに子規はいちじるしく苦心をする必要がなかったであろうと推測されることである。

「蘭之巻」は漢文によって記されているけれども、子規は幼少の頃外祖父大原観山（旧松山藩儒）の許に通つて漢籍の素読を習つて以来、長い間漢文に親しんできていたのであるし（ただし、文章を作ることは少なかったらしい）、「萩之巻」は漢詩であるが、これも少年時に友人と同親吟会を組織して河東静溪（碧梧桐の父）にみてもらつたり、回覧雑誌を作つて自作を載せたりしてきた上に、上京後も、「東京へ来ても同じこと、少し勉強したことは詩作ばかり」（当惜分陰）というようなことであつたのであるから、作るのに格別に苦心をする必要がなかったのである。

「女郎花の巻」と「尾花のまき」の和歌と俳句については事情がいくらか違って自信はあ

まらなかったらしく、「わけて御断り申べきことくさぐさあり。薄^み、女郎花の二くさはまだつくりかたもよくハ知らで、その花を咲かせんとハかたはらいたしとの御咎もあるべけれど、そこが園主の好奇心なればひとへに御見ゆるしの程を願ふになん」(『七草集』跋文)と述べている。しかし、これにしても、作り馴れていなかったというだけのことであり、実作の経験がないわけではなかったことは、これ以前の作品が相当数のこざれているのをみても充分推測することができるのである。

「葬のまき」で謡曲まがいのものを作っているのは目新しく、いかにも子規らしい工夫である。しかし謡も上京後、親戚の藤野漸の家に寄寓している頃聞き馴れて、「藤野叔の内^{うち}にゐること長く、従て謡は度々聞きしことありて、何となくうれしく面白く感じ居たり。」(『筆まかせ』能楽)といているくらいであるから、これまで無関心できたのをここではじめて作ったというのではなかったのである。

理由の第二は、「女郎花の巻」と「尾花のまき」のごとく、ほぼ同じ題材を用いているもののあることである。子規がこれによって時間と労力とを節約できたであろうことは改めていうまでもあるまい。

第三は、しかも夏休中に作られたのは『七草集』の全部ではなく、「はじめより此集を七草集とはいふものから去年の夏つくりしは五巻のみ」(『七草集』跋文)と翌春に述べているように五巻だけであったことである。

第四は、加うるにこの夏休みが途中で延長になったことで、はじめ「従例得暇六十餘日」(墨江僑居記)というのが(この年の夏休みは『第一高等中学校一覽』によれば、七月十一日から九月十日までであったが、実際は六月下旬からはじまっていたようである)途中で学校側の都合で延び、結局「九十日はかりも月香楼にすまひける」(「女郎花の巻」詞書)ということになったのであった。もっとも子規が『七草集』の制作を思い立ったのは、この休みが延長になってからのこととも思われ、もしそうであれば、このことは理由にはならないわけである。

おわりに第五として、子規が筆の速く、かつ根気のある人であったことを挙げなければならないであろう。子規の筆の速かったことはたとえば句作をしても、「一昨日は南塘先生来庵競吟四五十句昨日は非風瓢亭二子来庵午後競吟百七八十句瓢亭帰管後非風と二人にて一題百句のせり吟興行仕候(時間二時間許り尤中にて飯などくひ申候)」(河東乘五郎宛書簡、明治二十五・九・五)と書いているくらいであるし、根気のよかったことは、その俳句分類の仕事を思いおこしてみれば明らかである。

このような子規が、「三箇月の後には脳患に陥」(当惜分陰)ったというほど創作にうち込んだのであるから、『七草集』が休中にできたとしても、さして不思議ではなかったのである。

こうして『七草集』の制作にかかわる疑問のうち、あとの方は氷解するとしても、前の方つまり子規が向島の文雅の伝統というべきものについてどの程度の知識をもっていたかという疑問については依然として明瞭ではない。これは今のところ不明としておくより仕方がないであろう。しかし子規が、「寄墨田川名所恋」のような作品を作りえたことについては、つぎのように考えることもできそうである。すなわち子規が向島に仮寓したのが勉学のためであったとすれば、子規は当然そこに多くの書物を持ち込んでいたであろう。その書物

の助力をえたのではなからうか。

そこで、このことを調べてみると、やはりこの推測のとおりであったらしいことが明白になってくる。「刈萱のまき」で子規は古今の書物に親しんだことを記しているから、かれが向島の宿に多くの書物を持ち込んでいたことは確かであるといってよい。もともと子規は、休みが明けたら常盤会の寄宿舎に入ることを予定していたようで、向島に仮寓する際には、それまで住んでいた第一高等中学校の寄宿舎を出てしまっており、自分の持物は殆ど全部、向島の宿に持って行っていったらしいのである。問題は果してこのなかに『七草集』を作るに参考となる書籍があったかどうかであるが、なおくわしく調べると、「葬のまき」に『金槐和歌集』の歌数首が織り込まれていることが指摘されているなどのこともわかるから、これはあったものと推定するのが自然である。子規の向島の文雅の伝統にかかわる知識の程度がさほどのものではなかったとしても、もしこのようであったとするならば、子規は『七草集』を作ることが充分可能であったといえるであろう。

V

子規ができあがった『七草集』を土産として向島の仮寓を引き払ったのは、多分九月二十四日のことであつたらうと思われる。この日に子規が常盤会寄宿舎から友人の菊池謙二郎に宛てて出した端書がのこされておられ、それに、「早々逃ケ帰リタリ」とあることから、そのように推測されるのである。

後述の『七草集』の最初の評者笑天道士（大谷藤治郎）の評文の日付けが九月二十七日となっていて、引き揚げてからそれまでの間に日数がないことから推せば、子規は宿を引き払うまでにはおおよそ清書もすませているものと考えられる。もっとも、「女郎花の巻」には、「宿を立去る時主人に別れを惜みて」と詞書のある二首の歌がみられることや、「刈萱のまき」が内容からみて向島において作ったものとする事ができないなどのことから、これら一部のものは引き揚げてから作られたものであるに相違ない。しかし、そうしたものをのぞけば『七草集』は向島にいるうちにだいたいできあがっていたものと推定してよいと思われるのである。

子規は、宿を引き揚げる前には作品の仕上げに追われていたらしく、できればもう数日は向島に滞留したかったようである。それを予定をくりあげて引き揚げることにしたのは、「月香楼を去らんとする三日四日前によからぬ噂の聞えしより頭の病も何となく重りし心地せらるされとこゝにとゞまらはいよいよ癒えがたかるへしと思ひ一日もはやく都へ帰らんと心を定め」（「女郎花の巻」詞書）だからであった。この「よからぬ噂」というのは、さきにも触れた子規の宿としていた山本屋の娘おろくとの仲に関する噂で、はじめの頃同宿した三並・藤野の二人からでて友人間にひろまったものらしく、それが子規の耳にも聞えてきたのである。子規とおろくとの間に噂になるような関係があったものかどうかは必ずしも明らかではないけれども、潔癖な子規はその噂を気にし、早々にこの宿を引き払ったのであった。

向島を引き揚げた子規は、常盤会寄宿舎におちつき、おろくとの仲について弁疏した「刈萱のまき」（この巻の名は瞻西上人の歌「咲まじる花の仇名もたちぬべし何みたるらむ野辺のかるかや」から出ている）を作って加えるなどして『七草集』の仕上げをすませると、これを知友の間に回覧に供することにした。巻末に白紙を綴じ添えて、これに批評を記してく

れるよう求め、最初にまわしたのが休中いっしょに小旅行を試みた親友の大谷笑天のところであった。

『七草集』は笑天から次々と回覧されて後述するように絶讃を博したが、しかし、この作品を『七草集』と呼ぶならば、それは本来七巻なくてはならないであろう。しかるに子規がこの時までには作っていたものは五巻であり、内容的にも他と異なる上に秋の七草の一でもない「刈萱のまき」を加えても六巻であった。子規はそれでまだ今後補わなければならない二巻をこの時にのこしていたのである。

この課題となっていた『七草集』の補訂に子規がとりかかることにしたのは、この作品が好評をもって迎えられたのに気をよくしたこともあったであろう。子規は年末になって新たに「葛之巻」（筆名、野暮の舎蕪翠）を作ってこれに加えた。この巻は、向島の地誌であり、自筆の向島近辺の略図を添えている。

これで七巻は一応揃ったことになるけれども「刈萱のまき」は前述のように他と異質のものであった。それに弁疏は賢明でないとして除くように忠告してくれる者もあったので、子規はこれを除くことにし、翌年の四月に、さらに「瞿麦乃巻」を作って補った。この巻は原本の一部が欠けているので全貌がよくわからず、筆名も不明であるが、やはり向島を舞台とした物語の巻である。

こうして『七草集』は明治二十一年の夏休み以後、二度の補訂を経て、ついに完成をみたのである。子規がこれを改めて知友の間の回覧に供するべく、この作品の制作の由来を記し、批評を求めた「七草集を読ミ給へる君だちにまをす」という跋文を書きおえたのは、翌明治二十二年の五月一日のことである。

VI

完成した『七草集』は、文芸作品としてどのようにみらるべきものであったのであろうか。それが作品として未熟なものであったことはすでに冒頭や『七草集』の名の由来について触れた一節で述べてきたところである。子規の初期の写実的傾向を示すものとして注目すべき作品とされてきた「女郎花の巻」中の

檐のはにうゑつらねたる榎の木の下枝をあらみ白帆行く見ゆ（夏日向島閑居）

という歌なども、原本によれば、実際は子規が後年に加筆したためにこういうかたちになったものであって、当時の作は、

樹の間より川ゆく真帆の影見えて風のたえせぬすまひなりけり

のような、より常凡なものであったことについてはかつて指摘したことがある。

もっとも「七草集」のなかにも、まれではあるが

秋の蚊や畳にそふて低くとぶ

のような写実味のある新しい感覚の句もないことはないから、集中の作品がすべて平凡陳腐なものばかりであるといい切ってしまうことはできない。けれども、全体としてみれば、これらの作品は、古い風流意識になずんだ子規の才気の産物であったといって差支えないのである。

しかし、『七草集』は、これを読んだ知友をして驚嘆せしめるに充分なものであった。

七草各異其趣或勁拔或綽約于景于情弄筆自在実墨堤一幅之画図如使人在其境触其事（自

笑仙史)

それはこのように評されたし、また、幼年時から親しくしてきた友人をさえも、

おのれハ正岡大人と同じ郷の生れにて幼き時よりいと睦まじき友たちなりければ大人の
人となりをもよく知りまた大人の文かくわざに巧みなることをも知りぬされど今までハ
大人ハひろき文学の中にてあるものをば深く極め玉ふべけれどあるものハなほうひまな
びにてまた全く指をそめ玉はぬものもあるべしと思ひあたるにこの七草集をみるニおよ
びて先きに己れの思ひあたることハ全くあやまりにして大人の才ハそののちとみに秀で
さしにもひろき文学の世界をばたてよこにたびしまわりこの世界のことならばしらぬと
いふことなきまでにすゝみ玉へるをしりたく打ち驚きぬ(無始無終楼主人)

と驚かしたのである。服部嘉陳(楠谷)のように常盤会寄宿舎の監督をつとめていたほどの
年輩の者をもそれは、

嗚呼何其多才多能哉僕惟驚嘆焉耳

と感服させたのであった。

各巻のなかでもことに読者を歎賞せしめたのは「蕨のまき」であり、子規は「余二三の人
に向ひて大胆にも「七巻中少しにても取るべき処ありと思ひ給ふ巻は何なるや」と問ひしに
皆蕨の巻と答へたり」(批評聞き書き)と記している。

余巻頭ヨリ読ミ起シテ朝顔ニ至リ大呼シテ曰ク正岡君ノ妙思爰ニ至ルカト(栄陰牧師)

岡君之奇想風流自天外來者真可愛翫矣(楠谷服陳)

このようにこの巻については多くの者が感歎のことばを「七草集批評集」のなかにつらねて
いる。

これらの批評には誇張があり、それを読むにはむろん、その分だけさし引いて読まなくて
はならないであろう。しかし『七草集』を読んだ者がいずれも子規の才能に感服したことは
疑いのないことであり、そして『七草集』には、またそれだけのものがあったといえるであ
らう。

『七草集』の子規における意義は、しかし、上述のようなことよりも、むしろ、それ以上
に、それが子規に一つの転機をもたらしたことにこそ認められねばならない。

子規は「当惜分陰」というこれまでもたびたび引用してきた一文において、幼少時に外祖
父大原観山から懶惰をいましめられたことを述べて、その訓誡をつねに忘れることがなかつ
たにもかかわらず、勉強がきらいなため依然として怠惰のうちに成長してきたことを顧みた
のち、「連年遊びて暮しぬ。かくては行末の大望も覚束なしと心いらだつものから、二十一
年の夏は素志を果さんと閑静なる地を墨江にトし、此時より初めて勉強したり。(若し勉強
といふべくんば)」と『七草集』を制作した夏休みのことを述べて、そのあと、「観山翁逝
いて已に十餘年、翁をして今日の余を見せしめば、多少の満足を表せらるならん。」と記し
ているのである。子規はまたこれに続いて、「余さき頃夏目漱石と共に医師に往きて診察を
待つこと、二時間、漱石余に向て曰く、君はかく為すこともなくて過ぐす時間を惜しとは思
はざるやと。余答へて「さなり、余は昔『大禹聖人惜寸陰、衆人当惜分陰』といふ語を読み
法螺なりと思ひしが、其実なることを知りしは去年の夏休みより生まれり。」とも記してい
る。このような子規自身のことばをみれば、明治二十二年の夏休み以後の子規がこれまでの
怠惰から一変して勤勉な人となったことまぎれもない事実であることが知られるであろう。
後年の子規の仕事がかかる分陰を惜しむ勤勉の継続によってなし遂げられたものであること

は改めていうまでもないことである。むろん子規がこのように変っていったのは、『七草集』の制作を通して子規が創作の面白さを体得したこと、人びとの批評を通して自分の才能に自信を深めたことも大いに関係があるに相違ない。

つぎに、上記のこととも関係するが、夏目漱石との交友が『七草集』を媒介として親密化し、そのことによって子規の文芸活動がうながされたことも挙げておかななくてはならないであろう。

漱石と子規とは明治十六年いっしょに大学予備門に入学し、予備門が第一高等中学校にかわった(明治十九年)あともほぼ同じ道を歩いてきたものの——子規は十八年、漱石は十九年に落第を一度ずつしているの、そののちもだいたい同学年に在学していたのである——とくに親しく交わるといこともなく、数年を過ごしてきたのであった。それが明治二十二年の正月から急速に親しくなったので(ともに寄席通をもって任じていたところから話が合ったのだという)、『七草集』は漱石の許へも回覧されたのである。それに対して漱石は「詞兄之文情優而辞寡清秀超脱以神韻勝」にはじまる批評を加えるとともに七絶九首を添えたが、その批評の文をよむと、いかに漱石が『七草集』を読んでころを動かされたかを感じることができる(漱石は、この批評文のあとに「漱石妄批」と記した。「漱石」の号は、これ以後使われるようになったのである)。そして『七草集』によって刺戟をうけた漱石は、今度はこの年の夏駿房の旅に赴いた際には子規にみせるために『木屑録』という漢詩文集を作って批評を乞うたのである。英語の学力のある者として友人間に知られた漱石が漢詩文の方面にもまたすぐれた才能をもっているのを知って子規は驚き、「余の経験によるに英学に長ずる者は漢学に短なり、和学に長ずる者は数学に短なりといふが如く必ず一長一短あるものなり。独り漱石は長ぜるなく達せざる所なし。」(『木屑録』明治22年)と漱石の才能を激賞している。このようにして両者の関係は『七草集』を仲立ちとして親密の度を増していきそして、子規の文芸活動も活発化することになったのである。

『七草集』の制作の子規における意義は、おおよそ以上のようなものであった。この作品が子規の生涯において占める位置の決して軽いものではないことは、上述のごときの簡単な記述によっても推察できるであろう。本稿がさきにその制作の経緯にまで立ち入って考察を試みたのも、このような作品を十全に理解するためには、そこまで立ち入って考察してみなくてはならぬと考えたからでもあったのである。

さて本稿の意図したところは述べおえたので、これをもって稿をとじることにはしたいが、おわりにひとつ書きのこしてきたことがあるので、それを記しておきたい。

それは、この作品を作りはじめた明治二十一年の夏に子規がおかれていた状態が『七草集』の制作にどのようにかかわっているか、ということである。このことは推測の域を多く出るものではなく、書きのこしてきたのであるが、『七草集』の制作の問題を考える上で大事なことと思われるので、加えて記すことにしたのである。

子規が『七草集』を作った当時在学していた第一高等中学校の修業年限は五年、それが予科三年と本科二年とにわかれていたうち、子規は、二十一年の夏『七草集』の制作に着手した時には、ちょうどその予科をおえたところに位置していたのである。それで夏休みがかわって新学期がはじまるとともに本科に進学することになっていた子規は、ある程度の精神的な緊張のうちにあったであろうことがこのことから推測されるのである。ところが、子規の

緊張が実際にはさらに強かったであろうと思われるのは、当時の制度では本科へ進むには一応専攻分野をきめることが必要であつたらしく、子規はこの時には哲学（審美学）を専攻することにきめていたのではないかと考えられるふしがあるからにほかならない。専攻をきめたならばだれでも相当の緊張感をもち、新学期に備えて多少の勉強をしておこうと心掛けるのがふつうであろう。それで向島に仮寓するに際しての子規の気持のなかには、そうした方面の勉強をするということもあつたのではないかとも思われるのである。むろんこの推測があたっているかどうかは保証の限りではない。そしてさきに述べた子規の「行末の大望」とこの哲学専攻の志望とがただちに結びつくものであるかどうかについても問題がある。しかし、ともかく子規が『七草集』を作つたのは、上記のような時期であり、その時にかれが相当緊張した状態のなかにあつたであろうことはまちがいないのである。もし事情がこのようであるとすれば、そうした子規が当初の目的の勉強を途中で放棄し、方向をかえて『七草集』を作つたということについて、これをつぎのように考えることもできるのではないであろうか。すなわち、『七草集』はいうならば、このような状況のなかにおける子規の勉学へのエネルギーが創作へと転化したところに生まれた作品であつた、と。

本稿に関連あるものに拙稿「子規自筆『七草集』女郎花の巻の改作——加筆時期の推定を主として——」（『文芸研究』第48集）、翻刻と解説「子規稿『七草集』の女郎花の巻」（『アララギ』第58巻第1号）、『^{無何}七草集』批評集」（『^{有洲}東北工業大学紀要」第3巻）がある。御参照いただければ幸いである。